

関係機関長殿
病虫害防除員殿
調査員・情報員殿
農業資材販売等関係者殿

奈良県病虫害防除所長

平成29年度病虫害発生予報 第5号（9月予報）の送付について

このことについて、下記の通り発表しましたので送付します。安全・適正な防除についてご指導をお願いします。

今月の発生に注意を要する病虫害

作物名	病虫害名	発生時期	発生量
水稲	斑点米カメムシ類	平年並	やや多い
大豆	吸実性カメムシ類	平年並	やや多い
カンキツ	ミカンハダニ	平年並	やや多い
ナシ	黒斑病	平年並	やや多い
	黒星病	平年並	やや多い
ナス	うどんこ病	平年並	やや多い
	ミナミキイロアザミウマ	平年並	やや多い
	チャノホコリダニ	平年並	やや多い
ハクサイ・ダイコン	ハイマダラノメイガ	平年並	やや多い
キク	ハダニ類	平年並	やや多い
野菜・花き共通	アブラムシ類	平年並	やや多い

近畿地方の向こう1ヶ月（9月2日～10月1日）の気象予報では、天気は数日の周期で変わる見込みです。気温は平年より高い確率が50%、降水量は平年並の確率が40%、日照時間は平年並の確率が40%と予想されています。

9月は台風が多い季節です。強風による傷や降雨による湿度上昇は病害発生を助長します。台風接近が予想される場合は支柱の補強など事前に万全の備えを行い、通過後は障害部の除去や殺菌剤の予防散布などの病害対策を行いましょう。

6月1日～9月30日は農業危害防止運動の重点実施期間です。農薬のラベル記載事項の遵守と使用履歴の記帳、農薬の飛散防止、適正な保管管理等を徹底しましょう。

農薬のラベルに記載された適用作物名について、思い込みや読み違いによる誤使用が起こる可能性があります。以下のような作物間ではいずれも農薬登録内容が異なりますので、特に注意して下さい。

○トマトとミニトマト

○ピーマンとシシトウ

○実えんどう（未成熟な種子を収穫するもの）とさやえんどう（未成熟なさや付き豆を収穫するもの）とえんどうまめ（成熟した種子を収穫するもの）

○さやいんげん（未成熟なさや付き豆を収穫するもの）といんげんまめ（成熟した種子を収穫するもの）

○ネギとワケギ

その他、判断に迷った場合には、気軽に各農林振興事務所または病虫害防除所へお尋ねください。

奈良県農作物病害虫・雑草防除指導指針はWEB版に移行しました。以下のHPをご覧ください。

奈良県農薬情報システム <http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/nara>

I. 普通作物

1. 水 稻

(1) いもち病（穂いもち）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、平坦地域での葉いもちの発生ほ場率は23%、発病葉率は0.1%でした。中山間地域での穂いもちの発生は認められませんでした。
- 2) 今後、天候不順が続くと発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 出穂後に穂いもちの防除を行う場合は、早めに実施し、遅くとも傾穂期までに行います。ただし、防除に際しては薬剤の収穫前使用時期を必ず確認してから行います。

(2) 紋枯病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、平坦地域での発生ほ場率と発病株率はそれぞれ41%と1%でした。中山間地域ではそれぞれ38%と4.6%でした。

防除上の注意事項

- 1) 中山間地域で多発した場合は、倒伏を避けるため、早めに収穫します。
- 2) 平坦地域で病斑が中位節間以上に進展した場合は、減収や倒伏の恐れがありますので、直ちに防除を実施します。ただし、防除に際しては薬剤の収穫前使用時期を必ず確認してから行います。
- 3) 多発ほ場では、収穫時に稲わらを持ち出して処分します。また、翌年は代かき時の浮遊菌核の除去や中干し時の薬剤防除を行います。

(3) トビイロウンカ（秋ウンカ）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 農業研究開発センター（桜井市池之内）の予察灯への飛来は認められていません。
- 2) 8月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 9月上旬に株当たり3頭以上の寄生や、「坪枯れ」の前兆の黄化を認めた場合には、早急に防除を行います。薬剤は株元にかかるように散布してください。ただし稲刈り直前であれば、薬剤散布せずに早めに稲刈りを行います。

(4) 斑点米カメムシ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、平坦地域の発生ほ場率とすくい取り虫数（20回振り）はそれぞれ、本田では23%と0.6頭、周辺雑草では64%と34頭と平年に比べてやや多い発生でした。

防除上の注意事項

- 1) 糊熟期までに、水田周辺2～3mの額縁防除と周辺雑草のカメムシ防除を行います。防除適期は穂揃から7～10日後と、更にその7～10日後の2回です。
- 2) 稲刈りが近づいている地域では、薬剤の収穫前使用時期に注意します。

2. 大 豆

(1) 吸実性カメムシ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 農業研究開発センター（桜井市池之内）の予察灯にホソヘリカメムシ、アオクサカメムシの連続的な飛来が見られます。
- 2) 露地ナスの果実に飛来するアオクサカメムシがやや多い傾向にあります。

防除上の注意事項

- 1) 子実肥大中期（9月中・下旬）までの加害は、子実の充実不良や変形粒となります。
- 2) 紫斑病予防と併せて、9月中旬と下旬の2回防除します。

(2) ハスモンヨトウ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 農業研究開発センター（桜井市池之内）のフェロモントラップへの誘殺数は、やや少なく推移しています。
- 2) 8月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 若齢幼虫期までに防除すると防除効果が高いので、加害部位の早期発見に努め、気づいた時には早めに防除します。

II. 果樹・チャ

1. カンキツ

(1) ミカンハダニ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、寄生葉率は24%でした。園による発生程度の差が大きくなっています。

防除上の注意事項

- 1) 同一系統の薬剤は連用を避け、抵抗性の発達を防ぎます。

(2) 黒点病

予報内容 発生時期：やや遅い 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、発病はほとんど認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 感染源の枯れ枝をできるだけ取り除き、処分しておきます。
- 2) 8月下旬～9月上旬が防除適期です。

2. ナシ

(1) 黒斑病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、発病葉率は5.8%でした。
- 2) 徒長枝上の葉に発病が目立っています。

防除上の注意事項

- 1) 徒長枝葉や花芽への感染を防ぐため、収穫後にアントラコール顆粒水和剤等で防除します。あらかじめ徒長枝を整理しておき、薬液をかかりやすくします。

(2) 黒星病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、発病葉率は8.3%でした。

防除上の注意事項

- 1) 収穫後の9月下旬～10月に、キノンドーフロアブル又はオキシラン水和剤で防除を行い、翌年の伝染源となる芽基部への病原菌の感染を防止します。多発園では落葉期ま

でに2回防除を行います。

(3) ハダニ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、寄生葉率は8.6%でした。一部多発園がみられます。

防除上の注意事項

- 1) 収穫時期ですので、防除する場合は収穫前使用時期等の登録内容に十分注意します。
- 2) 収穫期間にハダニ類が多発した場合は、収穫終了後速やかに防除を行い、越冬密度を低下させます。

3. カキ

(1) 炭疽病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、発病果率は0.1%でした。

防除上の注意事項

- 1) 発生園では発病果から健全果への二次伝染を防ぐために、発病果は必ず除去し、園外で処分します。
- 2) 9月上中旬(富有)の基幹防除を丁寧にを行います。徒長枝が多い場合は整理し、薬液をかかりやすくします。また、発生園では基幹防除に加え、9月中下旬～10月上旬に追加防除を実施します。
- 3) 台風や長雨後には、直ちに治療効果を有する薬剤で防除を行い、感染拡大を防止します。

(2) うどんこ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 8月中旬の巡回調査では、発病葉率は5.0%でした。

防除上の注意事項

- 1) 気温の低下に伴い病勢が拡大します。富有で発生が多い場合、9月上中旬に防除を行います。

(3) フジコナカイガラムシ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 8月中旬の巡回調査では、被害果率は2.7%でした。

防除上の注意事項

- 1) 薬液がかかりにくい状態になっていますので、へたの裏側に薬液が届くように丁寧に散布します。収穫が近づいていますので、薬剤の収穫前使用時期に注意します。
- 2) 現在は、卵・成幼虫が混在し高い防除効果を得ることが難しくなっています。多発園では冬～春季の越冬期および初期防除を徹底します。

4. 果樹共通

(1) カメムシ類(チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ・クサギカメムシ)

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 予察水銀灯によるチャバネアオカメムシの誘殺数は、8月後半以降増加しており、一部調査地点では100頭/日を超える誘殺数が確認されています。
- 2) 県内カキ38園地の巡回調査では、被害果はほとんど認められませんでした。
- 3) 県内8ヶ所における8月下旬のヒノキ球果の口針鞘数調査では、平均2.6本/果と大きな増加はありません(球果からカメムシが離脱する目安は25本/果)。

防除上の注意事項

- 1) ヒノキ・スギの球果量が多いため、カメムシの広域的な多発生の心配は少ないと思われませんが、局地的な被害発生には今後も十分な注意が必要です。特に山際の園地や過

去にカメムシ被害の多かった園地は被害に遭いやすい傾向があります。

- 2) カキでは早生品種の収穫期に入りますが、富有園の見回りを欠かさず行います。また、収穫期のナシは有袋でも吸汁が可能ですので、発生に応じて適切に防除します。
- 3) カキなどの収穫期が近いので、防除する場合は収穫前使用時期等の登録内容を必ず確認し、使用基準を遵守します。

5. チ ャ

(1) 炭疽病・もち病

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 8月中旬の調査では、炭疽病、もち病ともに平年並の発生でした。

防除上の注意

- 1) 秋雨前線が停滞する場合、7～10日間隔で2回防除します。

(2) チャハマキ・チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 大和茶研究センター（奈良市矢田原町）において、フェロモントラップへの誘殺数、発生時期は平年並みでした。

防除上の注意

- 1) 早期発見に努め、若齢幼虫期に防除します。

(3) チャノホソガ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 大和茶研究センター（奈良市矢田原町）のフェロモントラップへの誘殺数は、平年並でした。

防除上の注意

- 1) 更新園、幼木園では新芽が連続して生育するので防除を徹底します。

(4) チャノミドリヒメヨコバイ・チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 8月中旬の調査では、発生量は平年並でした。

防除上の注意

- 1) 更新園、幼木園では新芽が連続して生育するので防除を徹底します。

(5) カンザワハダニ

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 8月中旬の調査では、発生量は平年並でした。

防除上の注意

- 1) 早期発見に努め、低密度での防除を徹底します。
- 2) 春から夏にかけての発生が多かった園や更新園、幼木園では発生状況を確認し、発生が認められる場合、薬剤散布を行います。
- 3) 薬剤の感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避けます。

Ⅲ. 野菜類・花き類

1. ナ ス

(1) 褐色腐敗病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。今後の秋雨や台風の接近による風雨で、多発する可能性があります。

防除上の注意事項

- 1) 被害枝葉および果実は伝染源となるので、早期には場外へ持ち出して処分します。
- 2) 病原菌は水によって伝染するため、ほ場及び畝上の排水を良くし、敷きわらマルチによって降雨による「はね上がり」伝染を回避します。
- 3) 降雨後に薬剤による予防を励行します。

(2) うどんこ病

予報内容 発生時期： 平年並 発生量： やや多い

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率33%、発病株率2.8%と平年よりやや多い発生でした。

防除上の注意事項

- 1) 整枝剪定によって通風を良くするとともに、発病葉を摘除し埋没処分します。
- 2) 多発後の薬剤防除は効果が劣るので、発生初期から防除します。
- 3) 発生ほ場周辺での半促成栽培の育苗は、苗が保菌する可能性が高いので、薬剤による予防を励行します。

(3) ミナミキイロアザミウマ

予報内容 発生時期： 平年並 発生量： やや多い

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は67%、被害果率は11%でした。

防除上の注意事項

- 1) 土着天敵を保護しているほ場では、ヒメハナカメムシ類が葉当たり0.1頭以上いる場合は防除は不要ですが、ヒメハナカメムシ類が少なく、被害果が増えてきた場合はモベントフロアブルを散布します。
- 2) 慣行防除を行っているほ場や、カメムシ類防除のために天敵保護を中止したほ場では、アフーム乳剤またはモベントフロアブルを散布します。
- 3) 殺虫剤感受性の低下が進んでいますので、効果に疑問を感じた場合は、各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談下さい。

(4) チャノホコリダニ

予報内容 発生時期： 平年並 発生量： やや多い

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率56%、発生株率3.2%でした。
- 2) 9月までは本種の発生が多い時期ですので注意が必要です。

防除上の注意事項

- 1) 虫体が非常に小さく、肉眼やルーペでの確認は困難です。新芽部への加害による新葉の萎縮や側枝の生育不良、果実がく部のコルク状の褐変を観察します。
- 2) 新芽部や果実とがくの隙間に寄生することから、十分な薬量を、寄生部位を意識して丁寧に散布します。
- 3) 摘除した枝葉、果実は速やかに持ち出し、処分します。

2. イチゴ

(1) 萎黄病

予報内容 発生時期： 平年並 発生量： やや少ない

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。
- 2) 今後も高温が続くと発生は助長されます。

防除上の注意事項

- 1) 苗床で発病株を認めた場合、ランナーでつながった親株、子苗および周辺株からの採苗は中止します。
- 2) 地床育苗では、浸冠水に注意します。また、ベンチ又はベッド育苗では、ベッド底部に水が溜まらないよう必ず不織布等を設置し、排水対策を徹底します。
- 3) 太陽熱消毒後の本ぼは、汚染土壌の持ち込みや浸冠水による病原菌の侵入を防ぐため、農機具や長靴に付いた泥や雨水等の流入に十分注意します。

- 4) 採苗時には、苗の選別を徹底して、発病株を本ぼへ持ち込まないようにします。
- 5) 雨よけ施設でのオガクズベンチ育苗では、培地の入れ替えに関わらず、採苗直後の8月下旬～9月上旬または翌年の5月上旬～6月上旬に太陽熱による消毒を行います。

(2) 炭疽病

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：やや少ない**

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。
- 2) 今後、天候不順が続くと発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 定植前までアントラコール顆粒水和剤、ジマンダイセン水和剤による定期的な予防を行います。また、降雨前後や葉かき作業後には、上記の定期的な予防散布に加えて、ベルコート水和剤またはセイビーフロアブル20等を散布します。
- 2) 親株およびランナーや周囲の子苗での発病を早期に発見し、発生部の周囲をシートや古ビニールで被覆後、直ちにゲッター水和剤を散布します。
- 3) 夜温25℃以上となる高温・多湿期に多発しやすくなります。罹病性品種のアスカルー、古都華、章姫、さがほのか等では、苗床が混み合っただけで蒸れないように、必ず株の整理を行います。
- 4) 多かん水や排水不良による過湿は、本病の発生に好適な条件となるので注意します。
- 5) 感染株を定植すると本ぼで多発しますので、見かけ上は健全な苗であっても、多発した育苗ほや発病株の周辺からの採苗を避けます。

(3) うどんこ病

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率10%、発病葉率0.2%でした。
- 2) 高温により一時的に発病が抑制されていますが、今後気温の低下とともに再び病勢が進展します。

防除上の注意事項

- 1) 褐色の停止型病斑がある苗床では、秋口から多発しやすいので、葉かきを実施してから早めに薬剤防除を開始します。
- 2) 薬剤防除時には動噴の圧力をやや低めにして、薬液が葉裏にかかるよう丁寧に散布します。
- 3) 薬剤耐性菌の出現を防止するため、ストロビルリン系剤やDMI剤などの同一系統薬剤の連用は避けます。

3. ネギ

(1) ネギハモグリバエ

予報内容 **発生時期：平年並** **発生量：平年並**

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率100%、寄生株率41%でした。

防除上の注意事項

- 1) アルバリン顆粒水溶剤の生育期株元灌注処理の効果が比較的高いので、発生初期に処理します。処理薬量が少ないと効果が低いので、ラベルに書かれた濃度、薬量をよく確認して処理します。また定植ネギの場合は、定植前日～定植時に育苗トレイに灌注処理を行います。
- 2) アルバリン顆粒水溶剤の生育期株元灌注処理の残効は2～4週間程度ですので、処理後も発生によく注意して、再発生が見られた場合はリーフガード顆粒水和剤などを散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいので、スカッシュ、まくびかななどの展着剤を加用します。
- 3) ハモグリバエが多発した残さは次の発生源になりますので、できるだけほ場の外に持ち出して処分します。また、多発ほ場の株元土中にはハモグリバエの蛹が高密度で残存しますので、次作の前にバスアミド微粒剤などを処理します。

(2) ネギアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 33%、被害株率 33%でした。

防除上の注意事項

- 1) アルバリン顆粒水溶剤の生育期株元灌注処理でネギハモグリバエと同時に防除します。また定植ネギの場合は、定植前日～定植時に育苗トレイに灌注処理を行います。
- 2) アルバリン顆粒水溶剤の生育期株元灌注処理の残効は4週間程度ですので、再発生が見られた場合は登録のある薬剤を定期的に散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいので、スカッシュ、まくぴかなどの展着剤を加用します。

4. キク

(1) 白さび病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。
- 2) 8月の高温により発病が抑制されていますが、今後、秋雨とともに発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 発病株や発病葉は伝染源となるので、ほ場に放置せず摘除し、埋没処分します。収穫後の株も放置せず、同様に早めに処分します。
- 2) 降雨が続く場合は、早めにジマンダイセンフロアブル等の予防剤で防除します。発生初期には、必ず下葉の発病葉を摘葉してから、ストロビルリン系剤のアミスター20フロアブル、またはDMI剤のアンビルフロアブル等で防除します。その後も降雨があれば、上位葉を中心に防除を行います。ただし、薬剤耐性菌が出現する恐れがありますので、同一系統薬剤の連用は避けます。
- 3) 罹病性品種を収穫後も親株として利用する場合、次年度の伝染源とならないよう、収穫後も継続的に下葉かきと薬剤による予防を行います。

5. 野菜類、花き類共通

(1) ハイマダラノメイガ（ハクサイ、ダイコン等のアブラナ科作物）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 9月前半は本種の多発時期です。高温少雨でさらに多発しますので注意が必要です。

防除上の注意事項

- 1) 本種は幼苗期に、幼虫が生長点付近の葉や芯を加害します。被害がひどいと芯止まりになり収穫皆無の恐れもありますので、早期発見、早期防除に努めます。
- 2) キャベツやブロッコリーよりも、ハクサイやダイコンを好む傾向がありますので、後者をよく観察し、防除適期をつかみます。いずれも本葉展開後は特に注意が必要です。
- 3) ハクサイ及びキャベツでは、育苗後半～定植当日にプレバソフロアブル5のかん注処理を行います。
- 4) 寒冷紗や1mm目合いのネットは、本種成虫に対し侵入抑制効果が高く、有効です。

(2) ハスモンヨトウ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 8月の農業研究開発センター（桜井市池之内）のフェロモントラップ誘殺数は、やや少なく推移しています。
- 2) 8月下旬の巡回調査では、発生株率はナスで11%、イチゴで10%でした。トマト、キュウリ、ネギ、キクでは発生は認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 卵塊や集団の若齢幼虫を発見したときは、摘葉して捕殺します。また若齢幼虫には薬剤のスポット散布も効果的です。
- 2) イチゴではハスモンヨトウが育苗期や定植後のビニル被覆までに産卵し、幼虫が食害します。定期的に観察し、発生を認め次第、プレオフロアブルやトルネードエースD

Fで防除します。被覆前の株整理後にもプレバソフロアブル5やフェニックス顆粒水和剤で確実に防除します。

(3) オオタバコガ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率はナスで22%、キクで25%、トマトで25%でした。
- 2) 8月の農業研究開発センター（桜井市池之内）のフェロモントラップ誘殺数は、やや少なく推移していますが、一部に誘殺量が多い地域が見られます。

防除上の注意事項

- 1) 基幹薬剤に対する感受性低下は確認されていませんが、抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けます。
- 2) 露地ナスで天敵保護に取り組んでいる場合は、プレバソフロアブル5またはプレオフロアブルを散布します。
- 3) 果実等の内部に食入している幼虫には、薬剤が直接接触しないので防除効果が劣ります。花蕾や新芽付近をよく観察して、内部に食入する前のふ化～若齢幼虫期に防除を行います。

(4) アブラムシ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率はイチゴ育苗で70%、キクで25%、ナスで3%でした。トマト、ネギでは発生は認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 薬剤抵抗性の発達を防止するため同一系統薬剤の連用は避けます。
- 2) 寄生部位に確実に薬液が付着するように、散布目標を確認してから散布します。
- 3) 宮崎、大分、愛媛、和歌山県の各県で、ネオニコチノイド系薬剤に対する感受性が低下したワタアブラムシが報告されています。本系統の薬剤の効果が低い時は、各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

(5) ハダニ類

予報内容 ナス、イチゴ 発生時期：平年並 発生量：平年並
キク 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率はキクで75%、イチゴ育苗で20%、ナスで2%でした。
- 2) 9月の気温は高いと予想されています。特に雨よけのイチゴではハダニの増殖に好適な条件となります。

防除上の注意事項

- 1) ナスでは、整枝剪定後に、葉裏に薬液が良くかかるように丁寧に防除します。
- 2) キクでは、葉裏を狙って発生が少ない時期から防除を行うように徹底します。
- 3) イチゴでは、苗床や仮植床での徹底防除は難しいので、定植・摘葉後に丁寧に防除します。
- 4) イチゴやキクに寄生するナミハダニ黄緑型（白ダニ）の薬剤感受性の低下が進んでいます。殺虫剤の効果に疑問を感じた場合は、各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。
- 5) 施設イチゴで、ナミハダニの薬剤感受性の低下により、薬剤による防除が困難となった場合には、天敵製剤や気門封鎖剤による防除を検討します。天敵製剤を導入する場合には使用できる農薬に制約があります。導入に際しては各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。また、気門封鎖剤はハダニ虫体に直接かからないと効果がなく、残効もありませんので、5～7日間隔で3回以上の連続散布を行います。

(6) コナジラミ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 8月下旬の巡回調査では、発生ほ場率はナスで56%、イチゴで10%、トマトで50%でした。
- 2) 秋期に増加する傾向があり、他の野菜、花き類でも注意が必要です。

防除上の注意事項

- 1) コナジラミ類は、多くの殺虫剤に対して感受性が低下しており、オンシツコナジラミとタバココナジラミ類では有効薬剤が異なりますので、防除薬剤の選択に注意が必要です。殺虫剤の効果に疑問を感じた場合は、各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。
- 2) タバココナジラミ類はトマト黄化葉巻病の病原ウイルス（TYLCV）を媒介します。既発生地域のトマト育苗ハウスでは、成虫侵入に注意し、0.4mm ネット被覆を行います。

※農薬に関する情報は、平成29年8月9日の農薬登録情報に基づいて記載しています。

お問い合わせは

奈良県病害虫防除所

TEL. 0744-47-4481

その他関連情報は以下をご覧ください

病害虫防除所ホームページ

<http://www.jppn.ne.jp/nara/>

奈良県農業情報システム（農作物病害虫・雑草防除指導指針）

<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/nara>